

県産豚ぶん肥料に

全農ぐんまが共同開発

コスト低減、安定供給へ

肥料コストの低減を図ろうと、JA全農ぐんまと肥料メーカーの朝日アグリア（東京都）は、JAグループ群馬独自の肥料「ブースター266」を共同で開発し

た。原料には県産の豚ぶん堆肥を35%使用することで「耕畜連携」の結びつきを強化。国際情勢の悪化に左右されることのない、持続可能で安定した肥料の供給を

目指している。

豚ぶんは沼田市利根町の養豚会社「利根沼田ドリームファーム」（黒沢豊社長）のものを使用。同社は全農ぐんまが運営している青果物一次加工センター（前橋市）で出た加工向けキャベツの残さを年間1千トほど譲り受け、飼料として豚に与えている。

開発した新肥料は堆肥と化成肥料の混合で、保証成分は窒素12%、リン酸6%、カリ6%。粒状に加工しているため散布しやすく、作業の効率化にもつながっている。朝日アグリアは「堆肥

が施肥と同時に土に供給されるので、土づくりに役立つ。堆肥の力で肥料分が無駄なく作物に吸収される」と説明する。

全農ぐんまは生産者の高齢化に伴う労働力不足の影響で、堆肥の散布量が低下していることを課題としていた。農林水産省が「みどりの食料システム戦略」の一環で、化学肥料の使用量を低減する方向性を示していること、世界的にSDGsへの関心が高まっていることなどから、県内の豚ぶん堆肥の活用に着目切った。

販売に当たり、県内JAで野菜などの現地試験を実施した。朝日アグリアによると、既存の肥料と同等以上の効果が出ているという。全農ぐんま肥料農業課は「この取り組みは堆肥活用の一環。販売を広げることで、堆肥の流通を促したい」としている。



利根沼田ドリームファームの豚ぶん堆肥で開発した肥料を手にする関係者

上毛新聞社提供

2023年11月1日
付上毛新聞
(JAひろば)